６　馬見二ノ谷遺跡出土品　一括　　［有形文化財（考古資料）］

［所在地］　橿原市畝傍町１番地（奈良県立橿原考古学研究所）
［所有者］　奈良県
［出土地］　北葛城郡河合町山坊
［時　代］　旧石器時代
［概　要］

馬見二ノ谷遺跡は、馬見丘陵の北東部に立地し、サヌカイト原産地である二上山から北東へ約７㎞の位置にあたる。馬見丘陵広域公園の建設にともなう平成 14・15 年度の発掘調査によって発見された旧石器時代の遺跡である。

旧石器時代の石器群は南北２ヵ所の谷で、谷を埋める堆積物から出土した。石器は複数の層位から出土しているが、層位ごとの石器型式や器種組成は共通し、相互に接合関係が認められる。大部分は明らかに旧石器時代の石器で、一括性があるものと考えられる。

当石器群はナイフ形石器と周縁加工尖頭器を指標とする。定型的な器種にはスクレイパーと石核がある。不定型な石器として、二次加工ある剥片や微細剥離痕ある剥片があり、他に小型の原石がある。大部分はサヌカイト製で、一部に玉髄製、チャート製、頁岩製、水晶製のものを含む。

ナイフ形石器は多様な形態である。二側縁加工のナイフ形石器が全体の４割以上を占め、次いで不定形剥片を素材とするものが多い。周縁加工尖頭器のうち 19 点はきわめて規格的な石器で、馬見型尖頭器と呼んでいる。この遺跡ではじめて出土した。横長剥片を素材として全周を腹面側から加工しており、長さ３㎝程度の菱形に近い平面形である。

石器製作の過程で生じた剥片や石核からは、79 組の接合資料が得られた。とくに石核を含む接合資料からは石器製作の手順が読み取れる。ふたつの谷にまたがって約 30m離れた位置で出土した剥片が接合する事例は、石器群が谷に挟まれた尾根上での石器製作に由来することを示している。

石器群の特徴は、多様なナイフ形石器と新たに確認された馬見型尖頭器を含むことにある。横長剥片剥離技術に関係する石核がおよそ半数を占めるが、瀬戸内技法の工程を示す剥片や石核を含まない。周縁加工尖頭器が伴うことは、ナイフ形石器文化期でも新しい段階の石器群であることを示す。馬見二ノ谷遺跡出土品により、特徴ある剥片剥離技術に基づく石器製作過程を明らかにできる。旧石器時代の編年に位置づけられ、重要な価値を持つ。

調査報告書『馬見二ノ谷遺跡』に図示および記載された、特徴的なものと接合資料に含まれるもの、621 点を選定して指定する。